

# Forma Justitiae

—— アウグスティヌス『三位一体論』

第八巻における神認識についての一考察——

上野正二

アウグスティヌスの『三位一体論』第八巻において、我々は、神の認識をめぐる一種の悪循環を含むと思われる二群の記事に遭遇する。以下の考察は、それぞれのテキストを解釈することによってアウグスティヌスの真意を明らかにすることを最終的にめざすものであるが、この小論では特に、そのでだてとして、同書同巻においてアウグスティヌスが語る、義人に対する愛と認識に関して生じてくる一つの問題を解明することに向けられる。

## 1

アウグスティヌスは『三位一体論』第八巻第四章で次のように言う。

「私たちは直視によってではなく信仰によって歩くから、たしかに私たちはまだ使徒パウロがいうように『顔と顔を合わせて』神を見てはいない。しかも、いま私たちが神を愛さなければ決して神を見ないであろう<sup>(1)</sup>。」

文字通りに受けとって、ここには我々が神を見ていないこと、神を愛すること (*diligere*) を条件として我々は神を見ること (*videre*) ができるようになることが記されている。

しかるに、ただちに続けてアウグスティヌスは言う。「しかし、誰が知らないものを愛するであろうか。知られ得るが愛され得ないものはある。私は問うのだが、知られないものが愛されうるであろうか。もしそれが可能でないならば、誰も神を知る前には愛さないことになる。神を知るということは、神を精神によって観て、<sup>(2)</sup> 確固として認めることでなくて何であろうか。」

上に神を愛することによって神を知ってゆくと言ったが、愛することを知り返してみると、愛するためにはまず知っていなければならない。知 (*scire*) が愛

(diligere) の条件となる。そうすると、神を愛するためには、我々は神を知っていなければならないことになる。

神を知るためには神を愛さなければならず、神を愛するためには神を知っていなければならない。これは悪循環ではないであろうか。このような問を前にして、ひとはしばしば、上の「神についての知」を二つの意味で読みわけて解決しようとする。すなわち、神が何であるか等、神についての全き知は持たないけれども、何らかの仕方では知っているのである、と。そして、この何らかの知は、神についての根原的知であるというふう<sup>(3)</sup>に述べられる。

だが、むしろ問題はここから始まるのではないか。アウグスティヌスは同書同巻で、その他にも一見矛盾すると見られる表現を用いている。すなわち、一方で神とは何かを我々は知らず、当に今それを探究していながら<sup>(4)</sup>、他方でその神である善そのものの観念 (notio boni) が我々のうちに刻印されているという<sup>(5)</sup>。また、我々は神を愛することによって神を見る<sup>(6)</sup>といいながら、たとえば義の不可変な形相 (forma justitiae) を神のうちに観る<sup>(7)</sup> (この表現は、神を見ているが故にそれに照らして不可変の形相を見ることができるといふ類似の表現<sup>(8)</sup>を想起させる) とのべている。これらの表現が矛盾するものでないことは、上のように意味の相違を明らかにすることを通じて了解することができるであろう。しかし、それでは、「何らかの仕方では知っている神の知」とはいかなる知であるのか。また「神の観念が我々のうちに刻印されている」や「神のうちに義の不可変の形相を見る」とはいかなることであるのか。

我々の手近にあってすでに知られたことがらを通じて未だ知られていない神へと到ろうとする、いわば上昇の道を示す表現と、神が予め知られているが故に我々は諸々のことがらを判断し、知ることができるとする下降の道を示す表現とが錯綜しているテキストを、我々はアウグスティヌスの真意を問いつつ読むことによって、これらの諸点について可能な限り明らかにしてゆきたい。

## 2

神を知ろうとするアウグスティヌスは、我々の手近にある、「いわば知られたことがら」から出発する。たとえば、我々の日常行っている判断をふり返って我々は神に到る、という例があげられよう。すなわち、我々は、しかじかの大地はよい、し

かじかの人は善いと言う。このように言う時、たしかに我々はそれらを知っていることがらであるかのように語っているのである。しかし、我々はそれを本当に知っているであろうか。知っているといえるのはどのような場合であろうか。この間に答えることによって、神への接近がなされるであろう。

アウグスティヌスはいふ。

「これはよい。あれはよい。これ、あれをとり去れ。そして、できれば善そのものを見よ。このようにして君は、或る他の善によって善であるのではなく、すべての善の善である神を見るであろう。<sup>(9)</sup>」

あれこれのものを善いということからどのようにして善の善である神を見るのだろうか。アウグスティヌスは「このようにして (ita)」というが、我々にはそれがどのようにであるかはいまだ不明である。しかし、彼は次のように語るについて説明しようとする。

「というのも、これらの全ての善きものにおいて……私たちが真実に判断する時、もし私たちに善そのものの観念が刻印されていなければ、或るものを他のものよりも善いとはいわないからである。<sup>(10)</sup>」

と。おそらく、ここには、我々が善きものについて判断する時、いいかえれば、我々が或る善きものについて知っているといえる時、当面の善きものは、或るいっそうよく知られた「善の判断の規範」に合致しているのだということが前提としてある。よって、我々が判断を行っているという事実から、我々は判断の規範を知っているはずだといわれるのであり、また、善の判断の規範たる善そのものを神であるとするならば、我々は神を知っているはずだと結論されるのであろう。

けれども、善の観念の刻印とは何をいうのであるかは、なお問題である。また我々が日常善について判断を行っているとしても、そこからただちに我々は神を知っていると結論するのは早計であろう。我々の判断には判断の規範の認識およびこれへの照合が必ず伴うとはいっても、その都度の判断の規範が、神とも呼ばれる善の善たる規範であるとは即断しがたいからである。

たとえば、「肥沃な農園はよい」という判断<sup>(11)</sup>をとってみる。なぜ「肥沃な農園」が「よい」と結びつくのか。ここでただ善の観念が我々のうちに刻印されているからだというだけでは説明は不十分である。その都度の判断が直接に、神ともよばれて

いる「善そのもの」の観念に照合されるとは限らないからである。この例の場合、たとえば「多く生産することはよい」という判断が先にあり、肥沃な農園は多くの生産を可能にするが故に「よい」といわれるにすぎないとも考えられるからである。また、この先在する判断がどうして成立したのかも再び問われるであろう。そして「多く生産することはよい」というのは「よい」と判断するための規範に依っているのだとしても、その規範自体は結局我々の単なる約束ごとにはすぎないという可能性はある。そして、もしそのようだとすると、アウグスティヌスが、「君が個々の善きものについて語られるのを聞く時、同時に善そのものを知解するから……<sup>(12)</sup>」というのはいかなることであるか、さらに問われねばならないであろう。

しかし、アウグスティヌスに従って、その都度の判断の規範と、いわば究極の規範との懸隔をうめるべく考察するためには、我々は、もっと我々に身近な別のことからについての考察をてがかりとしなければならない。アウグスティヌスは、そのようなものとして義人に対する愛と認識の問題、特にその根底にある義の形相の問題を論じている<sup>(13)</sup>と思われるのである。

### 3

さて、アウグスティヌスによれば、義人を我々が愛するということからして、我々は義人とは何かを知っているはずであると考えられる。人は自分が義人ではない時にも義人を愛する。しかし、愛するためにはひとはその対象を知っていなければならない。そこで、我々が義人を愛するというそのことからして、我々は義人を知っていると結論されるのである<sup>(14)</sup>。しかし、神について先にのべたように、愛の条件としての知は全き知であるとは限らない。義人を愛する前提条件となる義人についての認識も「或る仕方での認識」であり得よう。神の愛の場合、「知られずとも信じられるものは愛される<sup>(15)</sup>」とアウグスティヌスは言う。ここで「信じられるもの」とは疑いもなく「～であると信じられるもの」である限り、～の観念はすでに信じる者のうちにあるのであり、従って「何らかの仕方」で知られているものであった。義人の愛の場合、パウロが「～＝義人」であることは信じられるものであるが、義人の観念はそこで信じる者のうちに何らかの形ですでにあるのである。それがどういふ仕方であらうか、どういふ仕方であるのかが問題である。

「義しい (justus)」とは身体についていわれるのではなく、それは心の或る美しさ (quaedam pulchritudo animi) <sup>(16)</sup> である。この美しさが、あるいは、あれこれの人を義人としてさし示す徴し (signum) が義人の身体の動きや、また、人々が義人について語る話の中に躍動し、放射されてくるとも考えられよう。とはいえ、あれこれの人を義人としてさし示す徴しが義人の身体の動きに従って放射されるということと、義という心の美しさの或る形 (forma) が義人に関する我々の経験において受けとられるものであるという見解は全く別のことからして考察されねばならない。前者は『教師論』以来アウグスティヌスの持っている「res-signum」論を論拠にして退けられるのである。<sup>(17)</sup> それによれば次のようになる。もし義人の行動において義人の徴しが放射されるとしても、徴しとはもともと事柄をさし示すものである限り、あらかじめ事柄を知っている者以外には、それが何を表示しているかは不明であるから、我々は徴しから義人が何であるかを学ぶことはできないのである、と。

それでは、徴しがではなく、義人を義人たらしめている義の形相そのものが放射されるとしたらどうであろうか。アウグスティヌスは res sensibilis と res intelligibilis を区別する論法をもって、この間に対しても否定するかのように見える。

「もし私たちが自分の外において知るならば、或る物体において知るのである。しかし、私たちが語っているものは物的なものではない。」<sup>(18)</sup>

と。だが、このように否定することによって残されるのは、

「従って、私たちは自分のうちで義人とは何であるかを知っているのである。」<sup>(19)</sup>  
 という、すでにくり返された答である。義とは心に関するものであり物体ではなく、従って眼で見えるものではない。しかもそれに関して何らかの判断がなされる時、我々は自分のうちでそうするのである限り、その何らかの観念が我々のうちにあるとは一旦いうことができよう。だが我々が問うているのはそれがいかにしてあるのかということであった。これについては未だ何らの回答も得られていないのである。

#### 4

そこで我々は、アウグスティヌスの語る「内なる観念」の考察を一步進めて、そこに含意されている一つの注目すべき側面を明らかにしてゆくことにしたい。アウグスティヌスは、我々が義人を愛するという事実にもとづく一連の考察をしめく

くるに際して次のように述べはじめる。我々は聖書の句を読んで義人パウロへの愛を燃えたたせられる。それは彼がその句の示すように生きたと我々が信じるからであるが、また、我々が信じているような彼の生き方が神の奉仕者の生くべき生き方であるということを我々が認めるからである。しかも、そのように生くべきであるということは

「他の人から聞いたことを信じるのではなく、内的に私たち自身のもとの、あるいはむしろ私たちを越えて真理そのもののうちで認める<sup>(20)</sup>のだ。」

彼の生き方を神の奉仕者の生くべき生き方＝義人の生き方であると認めるのが「私たち自身のもとの」と言われるのは、一つには先にも見たように、義が物的なものではないからであるが、そればかりでなく、そこで行なわれている判断の主体がほかならぬ我々の理性であることの表白でもある。けれどもここにいる「私たちを越えて真理そのもののうちで」とはいかなることであろうか。類似の表現が用いられる、たとえば『真の宗教』では、判断主体たる理性は、判断される対象よりは優位に立っているが、それ自身によって判断するのではなく、理性が内なる真理に依拠することによってはじめて真なる判断がなされるのだと語られた<sup>(21)</sup>。それによると、認識の原理たる確実な真理が見てとられ、我々の判断とは、その都度提示される対象をその真理に照合するという手順が考えられていることになるであろう。

だが、この『三位一体論』第八巻でいわれる「真理そのもののうちで認める」の意味するところは、それとはちがっているように思われる。ここでの問題は、我々が聖書に記されたパウロの生き方を義人のそれと同定する際に、義の形相がどのようにして我々に見られるのかということにあり、アウグスティヌスは先にはただ、我々は知っているとか、我々のうちにあるとのべていたのを一歩進めた表現で「真理そのもののうちで認める」と言うのである。ややおいで

「なぜなら私たちは神のうちで人間がそれに則して生きるべきであると判断する義の不可変の形相を見るのであるから。」<sup>(22)</sup>

といわれることから明らかなように、ここでは、我々の観るのはあくまでも形相なのであり、従って真理は、それに当面の判断の対象が照合されるものとしてあるのではないのである。このようなコンテキストで語られる「真理そのもののうちで認める」とはいかなる意味で把握されるべきであろうか。我々は次のような方向へ考

察を進めてみたい。

## 5

アウグスティヌスは上のように、義の形相と聖書に記されたパウロの生き方の同定という問題を考えている。しかし義の形相という「心のことがら」と聖書の記述することがらとが同定されるとはどういうことであろうか。聖書が何らかの形相を記述し我々に示しているが故にこそ、それがいわゆる「我々のうちにある形相」と照合されるのではないか。しかし、そうだとすると、我々のうちにあらかじめ義の形相は存しなくとも、或る形相が他から示され、しかもそれが義の形相であると知らされるということも考えられ得るのではないであろうか。これまで保留してきた、義の形相が外から与えられる道がここにあることにならないであろうか。

アウグスティヌスは、義の形相を真理そのものの中に見て、これに基づいて義人を愛するのだと述べた直後に、こう言う。

「しかし、私はいかにしてかは知らないが、私たちは或る人がそのように生きたと信じる信仰によって、より烈しく形相そのものの愛へと促される<sup>(23)</sup>のだ。」

と。我々が義人を愛するという事実からして、我々はまずもって義の形相自体を愛するのだといわれる。これは、まず形相自体を愛し、そこからその形相をそなえているものを愛するという、いわば愛における下降の道である。しかるにそこに同時に「いかにしてかは知らないが」と断りながらも、形相を分有するものに対する愛にはじまり形相そのものの愛へ向うという愛における上昇の道が認められているのである。いまアウグスティヌスのいう「形相自体をより烈しく愛する」とは、形相自体がすでに自らのうちで見られており、それへの愛がつのるのであるであろうか、それとも、形相自体があらかじめ自明であったのではなく、何らかの仕方次第に明らかになり来り、それに対応して愛が烈しくなるというのであろうか。この文脈からは必ずしも明らかではない。しかし我々は別の箇處で次のことばを読むことができる。

「だから義人であると信じられる人は、愛する者が自らのもつて認め知解するこの形相と真理に基づいて愛されるのである。ところが、形相と真理はそのように他によって愛されるものではない。なぜなら、私たちは形相と真理以外にはその

ような或るものを見出さず、従って、それが知られていない時には、すでに私たちがそのような或るものを知っているものに基づいて信じることによって愛するであろうから。<sup>(24)</sup>」

ここには、愛されるものは愛の根拠となるものに対する愛に基づいて愛されることが述べられると共に、その愛の根拠となるものは無限に溯源して求められるべきものではなく、愛の第一の根拠となるものが形相と真理として押えられること、および、その形相と真理自体（何故ここで真理自体が語られているのか？）<sup>(25)</sup>が見出されない時にはかえって、それ自体が、その都度愛されるようなものについての知と愛からして愛されるのだということが述べられている。たとえば、しかじかの生き方が義人の生き方であるということを、信頼する者・権威ある者から聞き知っている者は、義の形相そのものは知らない場合でも、今知っている限り——問われてしかじかであると答え得る限り——での義人の生き方を愛することができるのであり、そこからして、それが精確にどのようにあるべきか、義の形相を知ろうとするのである。知ることの端緒として権威への信があるとするのはアウグスティヌスの『秩序論』以来確固として持っている立場であるのだ。ともかくこうして、我々は形相が或る仕方以外から受けとられる方向をアウグスティヌスの中にさぐることができよう。

## 6

しかし、この方向によって、権威ある者のことばを信ずる等のことにより、アウグスティヌスが「義の形相そのもの」と呼んでいるものが外から与えられるものであるとするのは明らかな誤りであろう。上の方向が、他方で彼のいう「(形相を) 真理そのもののうちで認める」ということと矛盾するものではないこと、否、むしろ後者が前者をも含意するものであることを示すために、我々はこの点を精確に理解しておかなければならない。アウグスティヌスが、上のように見れば、形相が外から与えられるかのように述べながらも、あくまでも「我々のうちで」「真理そのもののうちで」認められるとする理由は思うに次の点にある。すなわち、我々はその都度獲得してゆく形相の不完全であることを彼は徹底的に自覚していたのである。我々は自分の信頼する人のことばを通じて義人に関する或る形相を得る。これはアウグ



スティヌスの言う「我々がすでにそのような或るものを知っている」ものである。しかしこれらの形相は、未だ義人の形相として完全なものではない。それはいまだ、我々にとって知られている形相にすぎず、真にことばのさし示す完成・充実した形相に我々が向いゆく途上にあるものである。全き仕方で義人の形相そのもの知らない我々は、このある意味で知られた形相をもとにして、それを知るべく探究を始めるであろう。この時、我々は二重の意味で信に先立たれている。すなわち、一つはこのような仕方で義人について知っているといえるためには、そのことばを伝えた権威が信じられている。また、発見さるべく探究される形相そのものの存在が信じられているのである。

その都度の判断の規範として見られる「我々のうちに刻印された」形相とは、このような途上において獲得され、たえず完成へ向けられる形相であろう。従って、それ自体はいわばたえず真理に晒されているのである。「(形相を) 真理そのものうちで認める」という表現は、形相の常に探究さるべきものであること、人間の探究者としての境位を伝えるものであると思われるのである。

## 7

以上のように見てくるならば、今や我々は義人についてのべた、愛が知に先行されねばならぬということと、知が愛に先行されねばならぬということの正当な順序を見てとることができるであろう。そして、ここからただちに、神に関してはじめにかかけた問題に進むことができよう。しかし、その論究は別の機会にゆずらなければならぬ。

## 註

- (1) *De trinitate*. VIII. 4. 6 Cum enim per fidem adhuc ambulamus non per speciem, nondum utique videmus deum sicut idem ait facie ad faciem. Quem tamen nisi iam nunc diligamus, numquam videbimus 以下使用テキストは *Corpus Christianorum* による。
- (2) *ibid.* Sed quis diligit quod ignorat? Sciri enim aliquid et non diligi potest; diligi autem quod nescitur, quaero utrum possit quia si non potest, nemo diligit deum antequam sciat. Et quid est deum scire nisi eum mente conspicere

firmeque percipere.

- (3) 山田晶『アウグスティヌスの根本問題』p. 105.
- (4) 『三位一体論』のテーマ。 (5) VIII. 3. 4.
- (6) VIII. 4. 6. (7) VIII. 9. 13.
- (8) cf. IX. 6. 9.
- (9) VIII. 3. 4. Bonum hoc et bonum illud. Tolle hoc et illud, et vide ipsum bonum si potes; ita deum videbis, non alio bono bonum, sed bonum omnis boni.
- (10) *ibid.* Neque enim in his omnibus bonis...diceremus aliud alio melius cum vere iudicamus nisi esset nobis impressa notio ipsius boni...
- (11) *ibid.*
- (12) VIII. 3. 5. simul enim et ipsum intellegis, cum audis hoc aut illud bonum.
- (13) VIII. 4. 7 以下。 (14) VIII. 6. 9.
- (15) VIII. 4. 6. (16) VIII. 6. 9.
- (17) VIII. 6. 9. cf. *De Magistro*. 10. 33 ff.
- (18) VIII. 6. 9. Si extra quam nos novimus, in corpore aliquo novimus. Sed non est ista res corporis.
- (19) *ibid.* In nobis igitur novimus quid sit iustus.
- (20) VIII. 9. 13. non de aliquibus auditum credimus sed intus apud nos, vel potius supra nos in ipsa veritate conspiciamus.
- (21) *De Vera Religione*. 39. 72. 稲垣良典. 「判断と真理—トマス判断論のアウグスティヌスの源泉に関する一考察」『聖トマス学院論叢』1977, 参照。
- (22) VIII. 9. 13. ...quia in deo conspiciamus incommutabilem formam iustitiae secundum quam hominem vivere oportere iudicamus. 神を愛することにより神を知ってゆく方向を説明するものであるから、神をまず見て、形相を知るというものではない。
- (23) *ibid.* Sed nescio quomodo amplius et in ipsius formae caritatem excitamur per fidem qua credimus vixisse sic aliquem...
- (24) VIII. 6. 9. Homo ergo qui creditur iustus, ex ea forma et veritate diligitur quam cernit et intellegit apud se ille qui diligit; ipsa vero forma et veritas non est quomodo aliunde diligatur. Neque enim invenimus aliquid tale praeter ipsam ut eam cum incognita est credendo diligamus ex eo quod iam tale aliquid novimus.
- (25) 『真の宗教』では美の規範が真理と言いかえられる。我々はここで、義人に関する考察が、神認識の単なる予備考察ではないことを知るであろう。